



清流通信第 211 章でも少し紹介した“学生キャンプ 2014”。四万十川流域の文化的景観の活用の一つとして流域 5 市町（四万十市、四万十町、中土佐町、梶原町、津野町）が連携して取り組んでおり、我々四万十川財団はその事務局として共に企画・運営を行っている。全国から大学生約 20 名を募り、四万十川流域で 2 泊 3 日のフィールドワークを実施後、ミニシンポジウムを開催して学びや成果、四万十川流域への提案を行ってもらおうという内容だ。昨年から引き続き今年で 2 年目を迎え、大雨・台風続きの 8 月からはとても考えられない晴天の中、今年も無事にキャンプを終えることが出来た。（H26.9.8～9.11 開催）

四万十の歩み 重要文化的景観選定から学生キャンプまで

そもそも重要文化的景観とは、文化財保護法第二条第 1 項第五号が示す「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」、すなわち文化的景観のうち、特に重要なものを「重要文化的景観」と選定することで保護していく新しい文化財保護の手法である。平成 16 年から始まったこの制度は、今年記念すべき 10 周年を迎えた。

四万十川流域が重要文化的景観に選定されたのは平成 21 年のこと。全国で初めて流域での選定となり、注目を浴びた。四万十川を要に、上流では千枚田と呼ばれる見事な棚田と全国初の棚田オーナー制度の導入、また下流では流通を担った港町が往事の面影を残す等、上流下流それぞれで少しずつ異なる暮らしと風景、一方では同じ四万十川からの恵みを受けて生活しているという流域共通の想い、また広範囲だからこそ見えてくる流れやストーリーに価値が認められた。

足並みを揃えての選定後は、流域連携を意識してロゴマークや統一看板、地図を作成したり、シンポジウムを開催するなど整備と周知に力を入れてきたが、徐々に文化的景観を地域に役立てたいという想いから活用にも目を向けるようになった。そこで企画したのが“学生キャンプ”である。選定準備や工事、委員会等を経験していくうちに、文化的景観を扱うには土木・生態学など様々な分野の視点と専門的知識が必要であることを痛感し始めてきたが、四万十川流域には文化財担当の職員は 1 人しかいない上に、大学が存在するわけでもない。地域からももっといろんなことを教えてもらいたいし、外からの柔軟で新しい視点も取り入れてみたい。

それなら、四万十をフィールドに先生と学生を招いて夏期大学みたいなものを開催したらどうだろうか、というのが事の発端であった。

平成 24 年度から企画を開始し、平成 25 年度は「ウチとソトから見る四万十」をテーマに初めてキャンプを開催。しかし、5 つもの市町が連携して行う事業だけに、計画通りには事は進まず、正直なところ“連携して無事に事業を行えたこと”が我々にとって初年度の大きな成果になったと言える部分もある。もちろん、ご尽力いただいた先生方との繋がりや専門的知見の導入、参加学生からもらった四



四万十川流域の
文化的景観

Cultural Landscape of the
Shimanto river basin

四万十川流域の文化的
景観ロゴマーク

万十を良くするための提案も、我々にとって大きな成果となったことは間違いない。

そして昨年の経験と反省を活かし、今年のキャンプにはさらに熱い想いをもって皆で取り組んできた。京都文教大学の森正美教授を全体コーディネーターとしてお迎えし、京都にお伺いしたり四万十にお越しいただいたり、メールで連絡を取り合いながら、また担当者会を幾度となく重ねながら約1年かけて今年のキャンプに力を注いできた。今年の目標は「文化的景観を流域ツーリズムに活かす」、テーマは「四万十に小さな旅を創る旅」ということで、地域で生きている資源を見つけ出し、それらを繋いで旅の行程表を作成することで普通の旅行とは少し違った知的な旅、本当の意味で地域のファンやリピーターになってくれるような旅の提案を目指した。舞台となったのは森林率91%、高齢化率65%、あのセラピーロードで有名な梶原町松原地区と、四万十川条例による高知県の環境共生モデル地区にも選定されたアクティブに活動している四万十市黒尊地区の2か所である。それぞれのコンセプトをもって学生と地域住民、行政が協力して旅レシピ創作に打ち込んだ。

学生キャンプ2014 当日

初日午前中は全員が四万十町に集まり全体ガイダンスを実施。全体の流れや事業について説明した後、早速松原と黒尊の2地区に別れてフィールドワークを行った。

～松原地区～

松原地区は、現在観光の主軸としてあるセラピーロードを中心に、その前後に繋がるアクティビティについて考えることで長時間滞在してもらえる旅レシピの創作を試みた。基本的にフィールドワークには地域の方に随行をお願いして松原の案内をしてもらったり一緒に食事をしたりと、地域の方と過ごす2泊3日、地域の方と創る旅レシピとなった。受け入れに関して地域の方は「松原に興味を持って目を輝かせる



学生のために、自分たちのできることは何でもしてあげたい」と孫を迎えるように優しく話してくれた。フィールドワークに随行してくれたお父さん方、おいしいものを食べさせてやりたいと朝早くから腕を振るってくれたお母さん方の気持ちを学生達もきっと感じることはできたのではないだろうか。

フィールドワークでは、松原の集落を散策して暮らしについて探ってきた。畑にいたおばあちゃんに話を聞いたり、セラピーロードが農業用水路を利用していることからその恩恵を受けている田んぼを見に行ったり、川で釣りをして夕食の一品を狙うおじちゃんに出会ったり、これまでの松原と今の松原がどうリンクしているのかを短い期間であるが少し掴めたのではないかと感じる。また地域の方を交えてのBBQを楽しんだ後は、しっかりと自分達の考えを整理し、まとめていった。

～黒尊地区～

黒尊地区では、既に利活用されている「くろそん手帖」に新たな一歩を提案すべく「勝手に楽しむくろそん手帖企画」をテーマに旅レシピ作りに取り組んだ。くろそん手帖を運営する地域住民グループ「黒尊むら」では、年に数回のツアーを企画してくろそん手帖の利用と黒尊のファンを増やそうと活動している。しかし、ツアーを企画しなくても自分達だ

けで興味をもって遊びに来てくれる人を増やしていきたいということで、今回学生達と協力して旅の行程表を作成することにした。

黒尊チームは自転車を利用して黒尊地区を回り、途中川遊びなども満喫しながらフィールドワークを行った。沈下橋や森林軌道跡などの昔の人が残したものの、願いを込めて卵を投げる淵といった言い伝え、まだ現在黒尊で暮らす人たちが仕掛けた智恵と技術、川との関わりについて自分達の生活と比較しながら考えをまとめていった。

黒尊地区の方々も学生が来ることをとても歓迎しており、写真や資料を持参していろんな話を聞かせてくれた。また川ガニの食べ方を実演で教えてくれたり、一緒になって川遊びを楽しんでくれたりと、お客様を迎えるのではなく、松原と同じく家族を迎えるように温かい気持ちで対応してくれた。このような温かさがまた四万十や黒尊のファンを増やすのだと、個人的にはとても嬉しく感じた。

～シンポジウム準備と当日～

キャンプ3日目の午後、2地区に別れていた学生が四万十市で集合し、翌日に控えたシンポジウムに向けて気持ちをひとつにした。お互いのプレゼン概要を説明し合ったり、森先生を中心に企画側から学生に指示を出したりと最終調整が進められた。途中、学生キャンプ最後の夜ということで、初めて全員がそろっての交流会も開催し、松原と黒尊それぞれのフィールドワークにや個人的な話についても盛り上がり、全国から集まった学生同士の仲も深まっていった。交流会後は、引き続きシンポジウムの準備。学生達の熱い想いは深夜まで途切れることはなかった。

そして迎えたシンポジウム当日。午前の部は、協力してくれた地域の方や観光業者等こちらが予め招待しておいた参加者約40人を交えてワークショップを実施。これまで学生の視点を中心に作り上げてきた旅レシピに、地域や観光の視点を取り入れ改善しようという狙いである。参加者からは、もっと大自然をアピールしてほしい、実現可能性を考えるとコストがかかりすぎるのではないか、民泊という考えをうまく取り入れることはできないか等様々な提案をいただくことができ、それらを取り入れて最終の旅レシピを作り上げていった。

そして午後。一般参加者を前に午前中のワークショップで完成させた旅レシピを発表。今回できてきた4つの旅レシピがこれである。「松原に恋する瞬間(レシピ)」「松原の孫になる」「CROSS × ON ～CROSSON in 黒尊～」 「黒尊パパ修行 ～格好良いお父さんになるために～」残念ながら今回の清流通信ではそれぞれの旅レシピの内容まで詳しく紹介することは難しいが、我々は今後この提案を基に内容やデザインを整えた旅レシピを完成させ、モニターツアーを実施する予定である。そしてモニターツアーの結果を学生達にフィードバックしたり、四万十川流域5市町で共有できる成果のまとめを行い、年度末には報告書を刊行する計画だ。キャンプは終わったがまだまだ続きのある学生キャンプ2014。もし興味をもってくれた方がおられたら、年度末まで暖かく見守っていただきたい。

